早稲田大学イスラーム地域研究機構主催・共催事業の特集

日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業

多文化環境下における価値の交渉
――イスラームとの共生に向けた発展的研究

クアラルンプールでの国際セミナー

福田　安志
早稲田大学イスラーム地域研究機構
研究院教授

マレーシアのクアラルンプールにおいて、二〇一四年一二月一三日と一四日の二日間にわたり、多文化環境下におけるイスラームとの共生を大きなテーマに掲げた国際セミナー“International Conference on Islam and Multiculturalism: Exploring Islamic Studies within a Symbiotic Framework”が開催された。

早稲田大学イスラーム地域研究機構では、二〇一四年度より日本学術振興会の補助を得て国際的な共同研究「多文化環境下における価値の交渉――イスラームとの共生に向けた発展的研究」（英文名：Negotiating Values in Multicultural Circumstances: Toward the Symbiosis from Islamic Area Studies）を発足させた。その共同研究はマレーシアのマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院（AEI）、アラブ首長国連邦のニューヨーク大学アブダビ校人文学部を主要な相手として、三か年計画で共同研究を行うもので、初年度の二〇一四年には、共同研究・



会場：マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院



全体集合写真

研究交流の一環としてマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院において三機関の共催で国際セミナーを開催したものである。

会場は、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院の施設を使って行われ、日本、マレーシア、アラブ首長国連邦などの大学教員を中心とした、多様な地域と幅広い分野を研究する四〇名ほどの研究者が集い、盛会であった。

国際セミナーの初日は九時過ぎに始まったが、はじめに、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院院長のMd Nasrudin Md Akhir氏から開会の辞が述べられた。Md Nasrudin氏からは、早稲田大学イスラーム地域研究機構とマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院との間では二〇一三年度までの三年間の研究協力の実績があり、ニューヨーク大学アブダビ校が新しく加わった今回の共同研究は、共同研究・研究交流をさらに発展させることになろう、また、今回の共同研究は研究のみならず教育の面でも大きな意義を持つことなどが述べられた。

続いて同じく開会の辞を述べた早稲田大学イスラーム地域研究機構長の桜井啓子氏からは、今回の共同研究の経緯や共同研究の目的について述べられ、共同研究は若手研究者の育成という点でも大きな意義があることが話された。その後、在マレーシア日本国特命全権大使の宮川眞喜雄氏より歓迎の辞が述べられた。宮川大使の話では、東南アジアでのイスラームについての紹介があり、また、イスラームとの共生の必要性が強調された。

続いて、セッションがはじまり同じ日に三つのセッションが行われ、その日の終わりには日本の若手研究者によるポスターセッションが行われた。翌日には二つのセッションが行われた。それぞれのセッションの内容については、以下に紹介する。（なお、本号巻末の「活動報告」欄に本セミナーのプログラムが掲載されているので併せてご参照いただきたい）

セッション1
Interpreting Halal Values in Multicultural Societies

細田　和江
中央大学政策文化総合研究所準研究員

一日目の第一セッション、いわゆるハラール・セッションは、マレーシア、日本、インドネシアなどアジア諸国における「ハラール」の解釈を多文化主義との関わりを通して検討するものであった。

第一の報告者Siti Rohaini Kassim氏による報告は、AEIのMd Nasrudin氏、Azmi Mat Akhir氏との共同研究であり、マレーシアにおけるハラールの解釈とその解釈がもたらす問題に焦点を当てるものであった。本報告では、JAKIMを中心とする国家プロジェクトによってハラール食品の厳格性を保持しているマレーシアにおいて、その厳格さ故に、非ムスリムの企業のなかに、より容易な非公式の認証を選択する、あるいはハラールの意味を誤解したまま運用するケースが示され、そうした現状の解決を探った。第二の報告は、福島康博氏による日本企業の東南アジア・ハラール市場参入に関する報告であった。宗教的な価値基準に踏み込めないという日本の政治体制のなかで、ハラールを受容することが



セッション風景





上：質疑応答、下：コーヒーブレイク

困難な日本国内の問題と、これまで日本企業が東南アジアに進出した際の国外での事例を提示し、日本が将来に向けて取り組むべき課題（どこに生産拠点を置くべきか、あるいは進出国の現状を把握し、柔軟に対応することなど）を展望した。三番目の登壇者である砂井紫里氏の報告は、台湾と日本のハラール受容に関するものであった。「ムスリム・フレンドリー」という独自のハラール解釈が広がる台湾と日本のハラール受容を比較することで、非イスラーム国家が世界的なハラール市場に参入していく際の問題点を浮かび上がらせつつ、食事（食文化）が異なる価値観や宗教規範を理解する架け橋になると結論づけた。最後の報告者Sukoso氏はインドネシアの事例から“Thoyyib”という価値観について論じた。ハラールを単に安全で、健康的なものであると同時にそれを消費するものや社会に「安心」を与えるもの＝halal thoyyib lifeと解釈し、その普及のためにインドネシアのBrawijaya大学が行なっているさまざまな取り組みについて報告をおこなった。

セッション全体を通して、「ハラール」というイスラームの価値基準が現代の多文化社会のなかでどう捉えられ、どう変容しているのかが、発表者の四名の事例報告で具体的になった。本セッションでの議論は、年を追うごとに拡大していく世界規模のハラール市場においてしばしばおこる文化摩擦の解決策を探る意味で大変意義のあるものであった。

セッション2
Migration and Multicultural Policies

帝京平成大学現代ライフ学部講師
柴山　信二朗

第二セッションでは、「移民と多文化政策」という統一タイトルのもと、四人のスピーカーが興味深い発表を行った。同セッションでは、スピーカー毎に発表、質疑応答という進行形式が採られたため、以下では、同進行形式に沿って概略を報告する。

冒頭で、司会の店田廣文氏（早稲田大学）がセッションの趣旨を簡潔に説明した後、大川真由子氏（テーマ：アラブ湾岸諸国の越境移民労働者）が、「アラブ湾岸諸国への越境移民労働」、「受入国側社会と移民労働者の関係」、「移民労働者供給国と受入国の駆引き」という三つのトピックについて、主にオマーンで実施した調査の結果に基づき発表を行った。質疑応答では、「移民と受入国間におけるイスラームの役割」など複数の質問があり、同質問に対しては「同文脈でイスラームは機能していない」旨の応答がなされた。

続いて演台に立ったSia Bik Kai氏（テーマ：マラヤ大学のムスリム留学生のプッシュ・プル要因と関心事項および直面する問題）は、マラヤ大学留学生を対象に実施した調査の結果から、留学生の学業・社会関係・関心事項などについて報告を行った。発表後、会場から「パキスタン、イラン、インド出自などの留学生の特性グループ毎に分析をするとより詳細なことがわかるだろう」とのコメントが寄せられた。

三人目のスピーカーである川﨑のぞみ氏（テーマ：越境：母娘のムスリム・アイデンティティ）は、日本在住のムスリム母娘を対象に実施した質的調査の結果から、日本においてムスリム／ムスリマであることの意味に焦点を当てた興味深い報告を行った。質疑応答では、「学校は何らかの配慮をしているのか」との問いに対し、「心配や気遣いはしている」というような応答がなされた。

同セッション最後の発表者オOmar Farouk氏（テーマ：台湾におけるイスラー



フロアー風景

ムのインドネシア化）は、台湾におけるイスラームの多様性について、インドネシア化という視点から報告を行った。質疑応答では、「二万人の人口に七つのモスクでは金曜礼拝ができないのでは」などの問が出されたが、同質問に対しては「ムサラスがある」との応答がなされていた。

第二セッション全体を通して、四五名程の聴衆が各スピーカーの発表に熱心に聴き入り、積極的な質疑応答やコメントが出され、大変活気のあるセッションであった。

末尾に蛇足となるが、同セッション開始時刻になっても会場には司会、スピーカーの他に人の姿はなく、多くの人々が時間を忘れたかのようにコーヒー・ブレークを楽しんでいた。セッションでの活況さと裏腹に、何とも東南アジアらしく、のんびりとした時間の流れがそこには感じられた。

セッション3
State Formation and Multiculturalism

杉本　悠子
早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

第三セッションはコンヴィーナー福田安志氏、司会Martin Klimke氏のもと、四つの報告・討論が行われた。最初の発表は佐藤尚平氏による“Decolonization and the Migrated Archives from Asia and Africa to Britain”であり、近年になって発見された一連の大英帝国の植民地に関する文書の存在が紹介された。文書の多くが破壊されるか極秘扱いとなっていたが、佐藤氏によると、それは帝国の名声を損なわないためであり、マレーシアの場合でも文書に書くかどうかの選択はこの政策に則ってなされた。


スコールの様子

二番目の発表は、Masha Kirasirova氏による“An Anticolonial State?: Soviet Internationalism from Stalin to Khrushchev”であり、スターリン時代とフルシチョフ時代のソヴィエト連邦の国際政策の違いが論じられた。アメリカや中国との競争が激しくなる中、ソ連は第三世界の国々の独立や民族運動に積極的に関与するようになった点で大きな違いがあり、また、連邦内で対宗教政策も変化した。各地でのモスク建設が例として挙げられている。

三番目は、Mohd Aminul Karim氏による報告“Are External Factors Impacting State-building in Bangladesh?”が行われた。宗教的・言語的に同質であるとされるバングラデシュであるが、実際は内戦の度に外来勢力に影響力を行使され、分断状態であることが、人口過密等と並んで民主政治や統治の面での問題の原因の一つであると指摘された。また、周囲を大国に囲まれた状態での国家形成には日本が参考になるかもしれないとの提案もあった。最後に、福田安志氏による報告“Oman and Indian People in the 18th and 19th Centuries”が行われ、先行研究ではあまり触れられてこなかった一六・一七・一八世紀のオマーン史を概観しつつ、同地でインド系住人が海上交易で優勢を築き、徴税や法学の分野等、ポルトガル人による支配の後、様々な面で重要な役割を果たしたことが示された。

上記四報告は、対象地域・時代が異なり、一見して繋がりを見出すのは難しいが、それをState Formationをキーワードに論じようとする意欲的な試みであった。セッション3の後半はスコールが激しく降り、室内でも雨音と雷鳴で発言者の声が聞こえにくい場面もあったが、質疑応答の時間にでは、壇上の発表者同士で議論が行われた。

セッション4
The Dynamics of Multiculturalism

小野　亮介
慶應義塾大学大学院文学研究科
後期博士課程





記念品授与の様子

坪井祐司氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）“The Formation of the Multilingual Public Sphere in British Malaya: Controversies around Malayness during the 1930s”は、マレー民族とは誰かという一九三〇年代の論争から、多言語間における世論の形成を取り上げた。報告者はジャウィ文字による『マジュリス』紙が主張するマレー系住民を核とする意見と、華人やインド系などの非マレー系住民を包摂する立場の英語紙のそれとを取り上げた。個人的にこの論争は、言語的・文化的集団としてのトルコ人か、クルド人などの非トルコ系を含む「テュルキエ人」（強引に訳すと「トルコ共和国人」）か、という現代トルコにおける同様の論争に通じるところがあると感じられた。

Nathalie Peutz氏（ニューヨーク大学アブダビ校）“Fraudulent Sultans in Fictitious Kingdoms: the Bogus Oil Concession as a Mahri-Socotri Challenge to Empire in the Western Indian Ocean”は、英国保護下にあったイエメン南部マフリ・ソコトラ首長国での偽石油利権を巡る議論に焦点を当てた。報告では、イエメン本土に支配権を確立していないソコトラ島の首長、アラブ・ヒムヤル王国という虚構を掲げ、独自の権力を主張する本土マフリの親族一派、彼らによる偽利権供与に乗ろうとするアメリカの石油企業と法律家、この海域に基地を確保したいイギリス、それぞれの思惑が交差する様子が具体的に語られた。報告者はありもしなかった存在の復活を目指す虚構が、サレハ退陣後の現代でも現れうると指摘したが、なぜ虚構や偽利権が生まれるに至ったかについては説明不足に感じられた。

Mohd Aminul Karim氏（ＡＥＩ）“Islam in a Multi-cultural Society: The Critical Issue of Balance”は、調和に関するクルアーンの章句やブハーリーらのハディースに依拠し、イスラームが東南アジアの多文化性に適合していることを論じた。この種の発表は他のイスラーム諸国でも珍しくはないのだろうが、環境問題、節度、自由、宗教の強制の否定、正義などの問題について、クルアーンからアプローチしようとする姿勢は、クルアーン解釈の自由度の高さを感じさせるものだった。しかし華人やキリスト教徒など東南アジアの非ムスリムとの間の対話において、それが有効な手段たり得るかは疑問に感じなくもなかった。

秋山徹氏（早稲田大学イスラーム地域研究機構）“Where the Three Worlds Met: Kyrgyz Nomads between the Nomadic and Islamic Factors under the Russian Imperial Rule”は、報告者の代表的な研究である一九世紀後半のクルグズ人将校シャブダンの多面性を論じたものだった。報告者は訃報や息子による回想、伝承などから、帝政ロシアに仕える現地社会との媒介者、中央ユーラシア遊牧世界の価値観に基づく勇者・バートゥル、そして巡礼を果たす敬虔なムスリムという三つの側面を明快に説明した。報告者の指摘する「三つの世界」それぞれと浅からぬ縁にあったオスマン帝国との関係については、本報告で紹介されたシャブダンによるヒジャーズ鉄道建設への寄付の他にも、研究の可能性が広がりうる印象を受けた。



セッション二日目

セッション5
Religion, Ethnicity, and Conflict within Muslim Communities

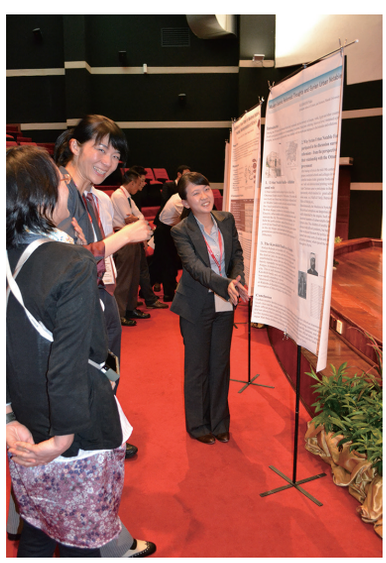
荒井　悠太
早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

日程二日目、会議の最後を飾る本セッションでは、司会にMohamed Nawab Mohamed Osman氏を迎え、ニューヨーク大学アブダビ校のMartin Klimke氏が主催した。研究報告は、同大学に所属する三名の研究者によるものである。

Caroline Ackley氏による第一報告“The Role of Sharia Based Restorative Justice in the Transition from Armed Conflict to Peace Building : Do Somalis Hold the View that the Restorative Justice Aspects within Qisas Offer a Solution ?”では、氏が実施したインタビュー調査に基づき、ソマリア人の持つ修復的司法の観念とシャリーアの関連性が分析された。氏はとくにソマリア内戦における同害報復qiṣāṣと賠償diya概念の機能に着目し、シャリーアが紛争解決―平和構築のメカニズムとして機能する一方で、アッシャバーブの例を挙げ、法解釈次第では過激な原理主義グループが武装闘争を正当化する根拠ともなり得ることを指摘した。

Marzia Balzani氏による第二報告“Old Industrial Space, New Suburban Uses : The Ahmadiyya Mosque”では、郊外における新たな土地利用の事例として、バイトゥルフトゥーフ・モスクが挙げられた。このモスクはアフマディー教団がロンドン南西部の旧工業用地に建設したものである。報告では、モスクを中心とするムスリム共同体の設立と宗派間対立という相反する問題について、アフマディー・ムスリムとその他のムスリムの対立を例として分析がなされた。

Erin Pettigrew氏による第三報告“Shurafa’ or Sorcerers ? Debates about Genealogy, Race, and Islamic Knowledge in the Southern Sahara”では、モーリタニア及びセネガルで尊敬を集めるAhel Guennarと呼ばれる家族連合体の在り方が分析された。同地域におけるイスラームの知識・秘儀の伝達に果たす役割、及び彼らに付与されたシャリーフ性が、Ahel Guennarとセネガルの共同体を結びつけていると指摘された。



ポスターセッション風景

本セッションにおける三つの報告は、各地域のムスリム共同体の在り方をめぐる優れたケーススタディであり、報告終了後の質疑応答も盛況で、多くの質問・コメントが寄せられた。しかしながら、議論が個々の事例に関するものに終始し、各報告間の

接点が見出せなかった、あるいは比較の視座を欠いていた点は課題として残るように思われる。今後こうした点が改善され、さらなる発展的な議論が展開されることを期待する。

ポスターセッション
Poster Session

井上　貴智
早稲田大学大学院文学研究科
博士後期課程

ポスターセッションは一日目の午後、第三セッションの後に行われた。当初メインセッションの行われた講堂前の廊下にて開催される予定であったが、急な天候変化のために、風雨による影響を考慮し、講堂内のステージ前で行われることとなった。

ポスターセッションの発表者は全六名であった。各ポスターの対象地域・時代・テーマは非常に多岐にわたるものであり、多様な研究バックグラウンドを持つ参加者の興味を満遍なく惹きつけるセッションとなっていた。

発表者名と発表テーマは以下のようである。

中央大学の細田和江氏は、「今日の日本食におけるコシェル認証」という題目で発表を行った。

慶応大学の小野亮介氏は、「大日本回教協会の写真コレクションに見える東南アジアのムスリム」という題目で発表を行った。

帝京平成大学の柴山信二朗氏は、「タイ深南部におけるマレー・ムスリムアイデンティティの役割」という題目で発表を行った。

早稲田大学の井上貴智は、「中世イスラーム文献に見られるバラ水蒸留技術――キーミーヤーの再解釈」という題目で発表を行った。

早稲田大学の杉本悠子氏は、「近代イスラーム改革思想とシリアにおける都市の名士」という題目で発表を行った。

早稲田大学の荒井悠太氏は、「『イバルの書』の系譜学的側面」という題目で発表を行った。

ポスターセッションは、四〇分間ほど行われた。初めに、各発表者によってそれぞれ一分ほどの研究の背景および研究内容の説明が行われた。その後、各発表者がポスターのそばに立ち、それぞれ質疑応答を行った。

ポスターセッションは、主に一般参加者よりも、他セッションの発表者による積極的参加が見られた。ポスターセッションの各発表者は、このような他セッションの発表者と途切れなくディスカッションを行いつつ、盛況のまま規定の時間を迎えることになった。ポスターセッションの発表者にとっては、東南アジアや欧米の、多岐にわたるアカデミック・バックグラウンドを持つ研究者と直接やりとりできる貴重な機会となった。また、急な予定の変更により、メイン会場である講堂のステージでポスターセッションを行うようにしたことで、逆に本国際会議の参加者に対して、ポスターセッションに対する注目を集める結果となったのではないかとも考えられ、幸運なハプニングであったと言えるのではなかろうか。

国際セミナーを振り返って

福田　安志
早稲田大学イスラーム地域研究機構
研究院教授

マラヤ大学は首都クアラルンプールの中心部からは少し離れた場所に位置しており、緑豊かな広大なキャンパスが広がっている。国際セミナーの会場となったマラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院は、小高い





夕食会風景

丘の上に立つ独立した建物で、そのなかの二〇〇人ほど収容可能な講堂が主要な会場として用いられ、集中した会議を開催することができた。

今回の国際セミナーは三年計画の共同研究・研究交流の初年度に当たり、また、これまで早稲田大学イスラーム地域研究機構とは共同研究の実績のなかったニューヨーク大学アブダビ校人文学部が共同研究に加わったこともあり、研究成果の発表と同時に、お互いの理解を深め共同研究・協力関係の展開につなげることも重要なテーマであった。

国際セミナーでは活発な議論が行われ、三年計画の共同研究・研究交流の初年度にふさわしいセミナーとなった。また、はじめの日と二日目には、アジア・ヨーロッパ研究院の施設内で昼食がふるまわれ、また、夜には宿泊のホテルで夕食会が行われ、懇親を深めることができた。今後の、共同研究・研究交流の順調な展開を期待できるものであった。



ハラール・マーク入りのコーヒーメーカー

また、ポスターセッションに日本から六名の若手研究者が参加したが、今後の共同研究・研究交流の成果を次の世代に引き継いでいく点で大きな意義があったものと思われる。

二〇一五年度には、アラブ首長国連邦のアブダビで本件国際共同研究事業の第二回目の国際セミナーを開催する計画である。今回のクアラルンプールでの国際セミナーには、ニューヨーク大学アブダビ校から数名の研究者が参加し、研究報告や質疑応答に参加しており、今回のセミナーは、一一月に計画されているアブダビでの国際セミナーにつなげる意味でも成功であった。

今回の国際セミナーでは、準備段階から、マラヤ大学アジア・ヨーロッパ研究院の関係者の方々に多大の尽力をいただいたが、この場を借りて、あらためて感謝を述べたい。



上：夕食会のデザート、下：二日目のランチタイム

左から吉村貴之氏、Martin Klimke氏、福田安志氏、桜井啓子氏、宮川眞喜雄氏、Md Nasrudin Md Akhir氏、Omar Farouk氏

